

Title	[浦添関係文献紹介] 鎌倉芳太郎ノート「浦添研究」
Author(s)	長間, 安彦
Citation	浦添市立図書館紀要 = Bulletin of the Urasoe City Library(2): 68-68
Issue Date	1990-12-25
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12001/20368
Rights	浦添市立図書館

〔浦添関係文献紹介〕

鎌倉芳太郎ノート「浦添研究」

鎌倉芳太郎が、琉球紅型の様式を基本に、ゲーテの色彩論に裏打ちされた鎌倉独自の芸術論の帰結として制作した作品「型絵染重山紅葉梅桜鬘結文上代袖長着」は、昭和32年（1957年）に発表された。

以後、鎌倉は琉球王国時代の王家御用の紅型宗家である澤岨、城間、知念家に伝承されていた古紅型の型紙を創作の基本にして、多くの紅型、型絵染の作品を制作し世に問うた。また、『古琉球型紙の研究』（1959年）、『古琉球型紙』（1959年）、『古琉球紅型』（色彩論・1967年、技法論・1969年）を京都書院から発行し、琉球紅型の歴史的価値、その美しさを考究して、伝統的技術の普及・発展を主張した。紅型の祖型で、15世紀以前に浦添地方で発達したと考えられる「浦添型紅型（菟弱型）」の発見もまた、鎌倉によるものである。

紅型の伝統的な技術習得の中から、さらに独特な型絵染を生み出した鎌倉は、その功績によって、昭和48年（1973年）に、国の重要無形文化財技術保持者（人間国宝）として個人認定されている。

しかし、鎌倉は、琉球紅型の発展に寄与しただけの人物ではない。大正末期、伊東忠太と共に琉球建築の研究および写真撮影などを行っており、現在実施されている首里城復元に、数多くの資料（古文書・写真）が活用されている。その研究活動は多岐に渡り、琉球（沖縄）の風物、美術工芸、民俗などがあり、今日の近世琉球・近代沖縄史研究にも多くの貴重な資料を提供しているのである。

ここで紹介する「浦添研究」は、鎌倉が昭和2年（1927年）5月に浦添の字仲間・伊祖・前田の民俗調査を行なった時のフィールドノートである。ノートの寸法縦20.5cm×横16.5cmの大学ノート（A5判）で、内容は全般的に絵図からなっているが、浦添以外に宜野湾市内の拝所など数件が記録されている。36ページという薄いフィールドノートだが、大正末期から昭和初期の浦添の民俗事象を知るうえでは、貴重な資料といえる。

資料表題の「浦添研究」は、ノート中で唯一の調査項目名が冠された「浦添研究、昭和二、五、三」からの仮称である。ノート分量36ページに収録された絵図等の中で、16ページ分が浦添関係資料として幾分纏められた形で記録されているので、ノート名「浦添研究」が適当であるように思われる。なお、沖縄県立芸術大学作成の『鎌倉芳太郎氏所蔵資料目録』（1984年）では、便宜的に「ノート16、フィールドノート」となっている。

内容を大別すると、①仲間村の「根殿内」②同村の「根屋」③仲間村の「與那覇門中御ビナデ順路」④伊祖村の「殿、城、拝泉」⑤浦添城跡⑥前田村の旗頭などである。とくに、伊祖村の殿などについては、「昭和二、五、七日午後。伊一、伊二……」と順記され、丁寧にまとめられている。

「根殿内」は建物の見取図（平面図、正面図）を描き、殿内に鎮座する御火神（御三ツモン）・御竈も詳細に図示されている。とくに注目されるのは、次のメモ書きであろう。根殿内での祭祀は、「八月十五夜ニハ『オチゝオマツリ』アリ、月ノ昇リヲ拝ム、五穀・御水・御茶ト等ヲ供ヘテ祀ル」とあり、浦添では月神信仰が観音（菩薩）信仰とは別の習俗としてあったことが分かる。根殿内前にあった東世への御通し石が「御フンシ石（御風水石）」と称していたことも記されている。また、根殿内を管理する與那覇門中の「御水撫で」例祭は3月13日、8月13日で、3月御ビナデの日には浦添ユウドレで清明祭も挙行されたこと等、現在聞き取りのできない事例が記され、貴重な民俗資料となっている。

最近、字伊祖の神アシャゲ、火神の殿（トゥン）が復元されたが、このノートには戦前の両齋場が図示され、寸法も明記してある。鎌倉氏の調査図に基づき復元されていればと、しごく残念に思われる。

現在、ノート『浦添研究』の原本は県立芸大に所蔵されているが、浦添市立図書館沖縄学研究室にはその複写本がある。（長間安彦）